

さをのしづく

樋口一葉

青空文庫

ある人のもとにて紫式部と清少納言のよしあしいかになどいふ事の侍りし　人は式部くくとたゞほめにほめぬ　しかあらんそれさる事ながら清はらのおもとは世にあはれの人也　名家の末なれば世のおぼえもかるからざりしやしらず　万に女ははかなき物なればはか／＼しき後見などもなくてはふれけむほどうしつらしなどみにしみぬべき事ぞ多かりけらし　やうく宮づかへに出初ぬる後宮の御いつくしみにさる人ありとしられ初て香爐峯の雪に簾をまくなど才たけたりとはかくしてぞあらはれぬ　少納言は心づからと身をもてなすよりはかくあるべき物ぞかくあれとも教ゆる人はあらざりき　式部はをさなきより父爲時がをしへ兄もありし

かば人のいもうとゝしてかずくにおさゆる所も有たりけん いはゞ富家に生れたる娘のすなほにそだちてそのほどくの人妻に成たるものとやいはまし 少納言は心たかく身のはか／＼しからざりしかばことに出で行ひにあらはさではいづらいかにと見る人もあらざりけんを式部は天台の一心三觀とやらんおさむる所ふかく侍りし 少納言も佛人にてはありけれどこゝろに浪のさわぎはげしければくまなき月は照らさずや侍りけん あはれなるはかくありける身ぞかし 才はおのづからにして徳はやしなふて後の物にこそ 風しづかにしては沖につり舟のかずも見るべく雲さわぎては外山のかげもおぼろげに成ぬべし 式部が日記に少納言をそしりしはさる事ながら此人はうきよのほか物なりける也 わが

日の本に三筆のひとつといひし世尊寺の卿をはじめ袖のうつり香
ゆかしとしたひし君たちのうちたれかはまがく敷しれものあら
んや さる人々の此君に別れぬる後いかならんつまを得たりとも
あはれたちまさりてなどおもへるはあらじ 一時の情に一とおも
はれぬるは此人のゝぞみたりぬる成かし 駿馬の骨といひける終
りのさまを淺ましとつまはじきするは其人をしらねばぞかし 宮
の御前すら撫子に涙をそゝぎ給ひけるほど少納言のかくありける
は道理也 おなじうは御堂どのが前にて猶今少しいはせまほしき
事侍り 此君を女としてあげつらふ人あやまれり はやう女のさ
かいをはなれぬる人なればつひの世につまも侍らざりき子も侍ら
ざりき 假初の筆すさび成ける枕の草子をひもとき侍るにうはべ

は花紅葉のうるはしげなることもふたゝび三度見もてゆくに哀れに淋しき氣ぞ此中にもこもり侍る 源氏物がたりを千古の名物とたゝゆるはその時その人のうちあひてつひにさるものゝ出來にけん 少納言に式部の才なしといふべからず 式部が徳は少納言にまさりたる事もとよりなれどさりとて少納言ををとしめるはあやまれり 式部は天つちのいとしごにて少納言は霜ふる野邊にすて子の身の上成るべし あはれなるは此君の上やといひしに人々あざみ笑ひぬ

物かく筆はやはらかに持てゆび先に力のいらざるぞよきとさる人仰せられしはげにさる事なるべし うでにて書くと又人のいひし

いかゞならん　うでになりとも力をこめたらば筆の自由をうしな
ひて文字はたどくしかるべくや　まことにかながきの上手は手
に筆のある事をわすれ紙にむかひての用意などおさくわすれて
ゆびはうごくともしらず心は筆のまゝにしたがふか筆は心のまゝ
にうごくはたゞこの者を心と紙との中立にしてうつし出すにこそ
侍らめ　されどこれはかな書きの事也　まなはいかゞあらんし
らず

まつ人の音づれは聞事まれにして厭はしき人はしばく来る　こ
の人をかりにかの人とおもはましかばうきは變じてたちまちよろ
こばしかるべきか　好悪もとこれ人欲のまなこより見ればぞかし

清風むねの中にふかばわづらひなからん物を

おもひてはいと遠きこともいたりてはほどなき物ぞかし 何がし
の官省とてもつどひて事をとるものなればいとたやすし 商社な
どのいと大きなるが人ひとりのこゝろよりおこりてかゝる大廈を
もかまへ大いなる事業をもなせりと見るに誠や泯江の水の末に驚
くが如し ほとけの道にも三界唯一心心外無別法とぞ侍るめる
はかなくて世に落はふれたる人をおろかにつたなしとてあざけら
んは恥かしかるべし 行水にも淵瀬あり人の世に窮達なからめや
は 孔子の道にくたしめられしたとへも侍る されば時にあひて

さかんにおごれる人もいかゞたふとぼんや 計らぬくるぜにうさ
ぎを得るとへも聞ゆ たゞみづからは心を平にして此ながれの
ほかにすまんこそめやすかるべけれ

此月をいかさまにしておくらん あはれよねもなし こがねなど
更に得べき望もあらず 身の職とてもわづかに筆とりてものかく
よりほかはあらず それとて一紙何ほどにかあたひせん 日々に
かうべをなやましてよみ出る歌どもにさへわれながらよろしとう
なづくもあらねばまして人の見るめはいかならん 賣文の徒とか
人のいやしがる物からこれをこがねにかへらるゝならばわれは親
の爲妹の爲はた我が衣食のため更にいとはじ 歌やと成てみせ先

にたにぎくども書ならべてんあはれかふ人なきをいかにせばや

春の雪のおもひがけずいと深々とつもりたるに何となく物めづら
 しく火をけに火さし物あぶりくひなどする折人のもとより文あり
 つねにうちとけぬ人のいとなれく敷おもふことをかきおこせ
 てよにある人々の評などさま／＼にあり をかしくてことに我
 を世にすね物の二葉の春をすて、秋の一葉とうそぶき給ふ事わけ
 は侍るべし 柳のいと結ぼれとけぬ片こひや發心のもとなど、
 いへる事多かり 折からをかしうて

ひたすらに厭ひははてじ名取川

なき名も戀のうちにぞ有ける

おのづからいひとく折は侍らん 波のぬれ衣などいはんもふるければとてかへしやりつ これをいかさまにつたへてことやうのものにやいひなすべき たれも人のこゝろ得しらぬ物なれば

いぎ連歌よまん下の句出し給へと人々いふ さらばいかにもつけ給へ上の句からにこそとて「つらきうきよのおもしろき哉」とかきてなげ侍ればあはれにくき出しぎまやと師の君わらふ 田中のみの子上の句かきて出す「月花もおもひすてゝは中々に」よみ得たりとて人々響動みをつくりぬ 折から伊藤の與助ぬし坐にあり 句作にかしらをなやまし居るいとをかしくてみの子ぬしふところ紙に書きつくるを見れば「いさをゝたてよ大君の爲とありし

こは近に征清の軍にしたがはん人なればなめり　こゝとかしこ
 といとあはひの隔たれば大聲にて物いはんもうし　其よしかきて
 よとみの子ぬしいふ　我れかきつけてなげやれば師の君取りてた
 かくうとふ

この一句田中のみの子より參らす　いくさの陣にはせむかふ
 て大功をたて給はん君の連歌のよみかけにうしろを見せ給はゞ
 長く卑怯の名や得給はん　たゞすみやかにくゝとてなん
 されどもえよみやらでかしらをかゝへぬ

物へもてゆくに筆のつか長くていと侘し少し切りてなどいふ人あ
 れど大方釣合して作りたる物なれば切りてはつかのいと軽く手ごゝ

ろかはるとさる人仰せられぬ　さる時は切たる後に物をつめて重
く成したるぞよきとありし　誠にさる事侍るべし

長三洲といふ人舌癌といふものをながく病みてうせき　身にはこ
となる事なきに舌の根のただくされにくさるゝ也　はじめ出来た
る時は手術をおこなひて切とりつ　二度目にはのどへかけてはれ
ぬ　此たびは人の手わざ及びがたしと名高き博士どものいひぬ
子らはいとけなし　いかで今一度など親しき限りなげゝどもいか
にかせん　自らはいとよく思ひはなれて大方世に心をとゞめずと
見えしがさる病ひの床に筆墨を取寄て物書く事一日もやすまず
うせての後には庫をもうづめぬべし　かゝる高名の人のかく世を

も思ひすてながらなからん後の子等の爲にと多くの反古を作り置
 けんこゝろ人の親のやみならずや さるにても持つまじきは子ぞ
 かし あはれきよくてありぬべき身の終に用なきくるしみをもし
 つる事よ

此人の書のいとうるはしと見ゆる中に黄金のにほひありなど京わ
 らべのしりう言するを心得ずと思ひつるがげに心ひかるゝものゝ
 有つればさぞ有けん あはれ深かし

歌の論をよくする人あり よろしき歌よみ出る人は少なしといふ
 誠に論の如くこゝろのとゝのひゆかば歌はかならずとゝのひぬ
 べし 静におもひこまかにかんがふるとも論ぜん爲に論をたてな

んはそれ虚論ぞかし 一事一物とてもこゝろにそまりたらば事理
ふたつなし もと末何かはわかれむ

つら之みつねは自然をうたひたる歌人なるべし 景樹を第二の貫
之といふはそのしらべ人の心をもとゝしてやすらかにすなほにと
をしへしによれり さるも猶そのよめる歌共の桂園一枝などよろ
しきも多かれど古今の歌どもに見くらぶれば姿かたちいたくおと
りて餘情などさらく侍らず さりともこれをかれにおとれりと
はいふべからず くだりゆくよのならひ人すなほの心をうしなひ
て物事たくみになりゆきわれと我本のこゝろをさへわするゝに寄
れり よこそりてにごれり ひとり歌の道に古代をとなふるとも

此流れをいかでかすまざるべき 世尊ふたゝび世にあらはれて衆生の濟度をなし給はん時此道の人丸くだりて和歌のながれむかしにかへりぬべし

よははかなくてをかしき物也 いさゝか筆に墨をぬりて白紙の上にそめいだせば文といひ歌とよびおのが心にかなひたらばやがて非凡絶倫などたゝゆるぞかし つくる人もとよりこゝろなしほむる者いかでながゝらんや きのふの歌才は今日の平凡に成て見かへるものもなきこそ哀れなれ 凡眼いかで玉石をしるべき わかち難きのまなこをもつてみだりに毀譽のことばを出さば時に冠をくつつにする事あり このあいだにうまれて此詞に左右さるべき文

士畫客のをかしさよ 人の見るをこのまず世の間を願はず靜に思
ひを筆墨の間にかまふるもの又いくたりかあらん これありては
じめて天地しるべく人事うかゞふにたるべし 夜深くして月くら
くともし火消えんとする破窓のもとにひとり思ひて猶ゑがきがた
し

おろかやわれをすね物といふ明治の清少といひ女西鶴といひ祇園
の百合がおもかけをしたふとさげび小万茶屋がむかしをうたふも
あめり 何事ぞや身は小官吏の乙娘に生れて手藝つたはらず文學
に縁とほくわづかに萩の舎が流れの末をくめりとも日々夜々の引
まどの烟こゝろにかゝりていかで古今の清くたかく新古今のあや
にめづらしき姿かたちをおもひうかべ得られん ましてやにほの

海の底深き式部が學藝おもひやるまゝにさかひはるか也 たゞい
さゝか六つなゝつのおさなだちより誰つたゆるとも覺えず心にう
つりたるものゝ折々にかたちをあらはしてかくはかなき文字沙た
にはなりつ 人見なばすねものなどことやうの名をや得たりけん
人はわれを戀にやぶれたる身とや思ふ あはれさるやさしき心
の人々に涙をそゝぐ我れぞかし このかすかなる身をさゝげて誠
をあらはさんとおもふ人もなし さらば我一代を何がための犠牲
などこと／＼敷とふ人もあらん 花は散時あり月はかくるゝ時
あり わが如きものわが如くして過ぬべき一生なるにはかなきす
ねものゝ呼名をかしうて

うつせみのよにすねものといふなるは

つま子もたぬをいふにや有らん

をかしの人ごとよな

春のゆふべよは花さきぬべしとて人ごゝろうかるゝ頃三日四日の
かけ斗に成て一物も家にとゞめずしづかにふみよむ時の心いとを
かし はぎくの小袖の上に羽織きて何がしくれがしの會に出で
つ もすそふまれて破らじと心づかひする又をかし 身のいやし
うて人のあなどる又をかし 此としの夏は江の嶋も見ん箱根にも
ゆかん名高き月花をなど家には一錢のたくはへもなくていひ居る
ことにをかし いかにして明日を過すらんとおもふにねがふこと
大方はづれゆくもをかし おもひの外になるもをかし すべてよ

の中はをかしき物也

青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集 第三卷（下）」筑摩書房

1978（昭和53）年11月10日発行

1988（昭和63）年4月30初版第4刷

※本作品のテキストを、底本は「一葉全集」筑摩書房、1953（昭和28）～1956（昭和31）年に拠っている。ただし、収録にあたっては、親本（「一葉全集」）にあった仮名の濁点をのぞいて本文を組んだ上で、ルビの位置に丸括弧におさめて親本の表記を掲げている。このファイルは、括弧内におさめられた「一葉全集」の表記にもとづいて作成した。底本の「枕の草紙」は、親本の「枕

の草子」で入れた。

入力：三州生桑

校正：今井忠夫

2004年1月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さをのしづく

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>